

さいほうとうしゅう

# 西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

## 第十一回

15章 ひな鳥の時代

安政四年（二八五七）

日米和親条約が締結され、鎖国に終わりを告げた嘉永七年（一八五四）は、年末に改元して安政元年となる。

一カ月後の翌安政二年（一八五五）一月、蘭書翻訳御用に箕作阮甫（みづくりげん ぼ）や勝海舟（かつかいしゅう）が任命され、幕府は洋学所の設立に向けて始動した。

そして十月には長崎に海軍伝習所が設置されるのである。そうした対応をしているうちに、蘭学を国家の骨格（ほねかく）に据（す）えるという動きは加速していく。

同十月、蘭癖大名（らんぺき）として名高い佐倉藩主（さくらはんしゆ）・堀田正睦（ほったまさよし）は江戸城に召喚（しょうわん）され、老中首座（らうちゆうしゆざ）になった。

老中・阿部正弘（あべまさひろ）が、完全に開国路線に舵（かじ）を切ったことを明確にした処断だった。そしてそれは体調を崩していた阿部正弘が、最後に打った一手となった。

その異例の大抜擢を実現させたのが、佐藤泰然の献言だったことはすでに述べた。

そうした動きは外部からは、高島秋帆・榎林栄建から伝えられた兵学に、ニーマンの国際情勢を加味した泰然が演出したに等しく見えた。

幕府の外交方針が開国容認に変わっていく間に、幕府を揺るがすもうひとつの問題が現れた。

將軍継嗣問題である。

十三代將軍・家定は暗君だと言われるが、それに反発する声もある。ただし彼が蒲柳の質で、補佐する者を立てるべきだという点では衆目は一致していた。

当然、その人物が次の將軍になると目された。しかし、その人選が問題になったのだ。

紀伊の徳川慶福と水戸の一橋慶喜が候補になった。それぞれの支持者は南紀派と一橋派と呼ばれた。

徳川慶福は家定の従弟に当たり、血筋は正当で、譜代大名の支持を得ていた。南紀派の筆頭は彦根藩主、井伊直弼だ。慶福の難点はまだ十歳と、少々幼なかつたことだ。

その観点からすると、水戸派が推す一橋慶喜は、十九歳と年齢も相応で、英明と評判だった。その上、一橋慶喜を推すのは父の水戸

藩前藩主の徳川斉昭なりあき、越前藩の松平春嶽えちぜん、そして薩摩藩の島津斉彬しゅんがく、さつま、しまづなりあきらなどだ。

だが彼らは、特に大奥では不評だった。

それは徳川斉昭が大奥不要論をぶち上げるような、傲慢な人物だったせいもある。

一方、この頃、越前藩の松平春嶽は明晰な英明君主として名高かったがまだ年若く、斉昭に深く心酔し、その経緯を実現しよう心に誓っていた。そして十月、春嶽が將軍継嗣を一橋慶喜にするよう旧知の藩主に書状を送ったことで、この問題がついに顕在化した。いち早く手を打ったのが、薩摩藩の島津斉彬である。

彼は將軍家定の奥方に自分の養女を嫁がせるといふ、露骨な政略結婚を強引に成立させた。

天璋院篤姫である。

そこには老中首座・阿部正弘の長期展望を含んだ画策も内包されていた。

こうして一橋派は、大奥に交渉できる橋頭堡を築いた。

しかしながらその強引な手法が祟り、却って大奥の反発を買い、思うような成果を出せずに終わった。

八月に天文台の翻訳方を「洋学所」として独立させた幕府は、翌

安政三年（一八五六）二月、「蕃書調所」ばんしよしよべしよと改め、四月に箕作阮甫、杉田成卿すぎたせいけいを教授方に任命した。

これは漢学しんがくの昌平黌しやうへいに相当する、蘭学の官学校とされた。

時を同じくして、旗本はたもとに軍事訓練を施す「講武所」かうぶしよも開所した。

その初代奉行はつだいぶぎやうには、かつて大坂在勤時に洪庵こうあんと懇意こんいにしていた久貝くがいいなばのかみまさのり因幡守正典いんぱんしゆてんが任じられた。

安政三年は、開国を巡るさまざまな動きが露あわになった年だった。

安政三年七月、米総領事タウンゼント・ハリスが強引きやういんに下田に上陸ぎやくせんじし、玉泉寺ぎくせんじに領事旗を掲げたため、幕府は駐在を迫認せざるを得なくなった。

こうした事態になって初めて、遅まきながら幕府は、評定所ひやうじやうしよ、海防掛かうがかり、大目付おおもめつけ、目付おんこくぶぎやう、遠国奉行おんこくぶぎやうらを一同に集め、通商条約の内容の検討けんこうを始めた。

安政四年（一八五七）四月、築地の講武所内に軍艦教授所が設置されたのに伴ともない、長崎の伝習生が教授に任命された。そのため、長崎海軍伝習所は二年後に閉鎖されることになる。

そして五月、米国と幕府は三港開港を含む下田協約を締結する。

これに伴い、ハリスは江戸参府を要求した。

そんな多事多難たじたなんの真まっ只中ただなかにあった日本を、ぎりぎりぎりぎりで舵取りかいてりしてきた老中・阿部正弘が病没びやうぼつしてしまう。

二十五歳で老中に就任して十四年、三十九歳の若さだった。

これは幕府にも、一橋派にとつても、痛恨事となった。

継嗣問題は、水戸の徳川斉昭侯の薫陶くんとうを受けた松平春嶽侯が主唱する形で進んだが、春嶽侯の切り札は阿部正弘との強い紐帯ちゆうたいだった。阿部正弘の奥方は春嶽の養女だったのである。

こうして幕政の重責は、老中首座・堀田正睦そうつけんの双肩せうけんに掛かることとなった。

十月、ハリスは江戸城に登城し、將軍家定との謁見えつけんを果たした。將軍がオランダ商館長や朝鮮、琉球りゅうきゅうの使節以外の人物と謁見するのは、これが初めてだった。

一方で幕府は八月、これまで和親条約を結んでいたオランダとも、更に自由に貿易ができるようにする追加条約を締結した。

その頃、オランダ艦隊が長崎に派遣されてきた。

幕府から第二次海軍伝習を委任されたカッテンディーケ艦長は、各部門の熟練者を同行していた。

軍医として同行した優秀なスタッフが、ユトレヒト軍医学校を卒業し、研修を終えたばかりの青年医師、ポンペ・ファン・メールデルフォルトである。そのポンペの元で、日本における近代医学が始まり、大きく育っていくことになる。

老中首座・堀田正睦の懐刀ふせこうがたなとして江戸に詰めていた泰然は、懐手ふせこうで渋い顔をして、目の前の次男を眺めていた。

松本良順りょうじゆんが泣きついてきたのである。

「父上、長崎では第二次海軍伝習所が設立されることになり、士官養成に対応するオランダ人一行が長崎に到着したそうです。中でも今回来日したオランダ人医師は学識豊かで、相当ご立派な方だとのこと。ついでには某それがしも長崎に留学してご教授いただきたいと思ひ、養父・良甫りょうほにお願いするなど、いろいろ算段していたところ、奥医師の親玉の多紀楽真院殿たきらくしんいんに、御典医の身で異人に学ぶなどとんでもないことだ、と睨にらまれてしまいました。下手を打つと松本家のお取り潰しになってしまいかねません。某はどうすればよいのでしょうか」

良順に、長々と相談事を聞かされた泰然は、ちつ、と舌打ちをする。

「まったく、そんなちっちゃなことでいちいちメソメソするんじゃないよ。今のおいらは、堀田殿の政策実現の補佐役という、天下の一大事で忙しい身なんだぜ。そういう細かなことは、自分でちっちゃつと決めて、さっさと片付けちまえばいいことだろうが」

そう言いながらも、我が子はさすがに可愛いらしく、解決策をくわげつさく呟つぶやいた。

「そんなのは、お前がとつと長崎に行つちまえば済んじまう話だ

ろ。底意地が悪い奥医師連中は尻が重いから、そうすれば何も言えなくなつちまうさ。長崎はいいぞ。江戸がせせこましく見えてくる。ましてや優秀なオランダ人の医者が来てるっていうんなら、行くかどうか、悩む必要は全くないだろうが」

良順の表情が、ぱあつと明るくなる。

「さすが父上。大変参考になりました。では、もうひとつだけご教示ください。長崎留学は舅殿のご尽力でなんとか許されるところまでこぎつけたものの、あくまでも海軍伝習の添え物で、単独の医学伝習は正式には認めない、と言われてしまいました。その上、修学できるのは某ひとりだけ、と釘を刺されております。ところが某の許には、長崎と一緒に修学したいと訴える者が引きも切りません。某は彼らの熱意を潰したくないのです。こちらはいかにすればよろしいのでしょうか」

泰然は深々と吐息をついた。

「まったく、お前は、どうしていちいち物事を小難しく考えやがるんだ。それだつて簡単だろ。オランダ人医師から学べるのはお前だけというお達しなら、他の野郎どもを全部、お前の舎弟にしちまえばいいだろ。オランダ人の講義をお前が聞いている隣で、傍聴している形にすればお咎めもなし、お前は子分を増やして万々歳だ。こんな好機を前にして、おたおたするなんて、真っ昼間から居眠り

こいてるんじゃねえぞ」

代を重ねる毎ごとに、佐藤家が小粒になるのは困ったものだ、といったもの愚痴ぐちを呟く。

——それにしても順の字と話していると、べらんめえ口調で叱つちまうのはなぜなんだろうな。

そう考えて、泰然は、ふと合点がいった。

——そうか、コイツはどこか、章あきらと似ているんだ……。

そして悪だくみを思いつき、泰然は、にっと笑った。

松本良順が長崎海軍伝習所の研修生となり、軍医のポンペから医学伝習を受け、最終的には医学伝習所として独立して運営されるようになるのは、それから三カ月後のことだった。

\*

泰然が、次男の良順に今後の方針を訓示した一カ月後。

御典医・松本良順の姿は大坂の過書町かしょまちにあった。

良順は、長崎に下る時、ついでに適塾ていじゆくに立ち寄って西の雄、緒方おがた洪庵の顔を拝んで行け、という泰然の言いつけに、素直に従ったのだ。



適塾の戸を叩いたのは、昼飯時を過ぎた、昼八つ時（午後二時頃）だった。

はげあたま  
禿頭の良順は、小袖の上に、黒地無紋の紗の生地むもん しやの十徳じっしやくを羽織り、腰に大小を差している。

供を従え、正式な御典医の成りで名乗りを上げた良順を見て、洪庵はほう、と吐息をついた。

——これはまた、立派な若武者であることよ。

父からです、と言つて差し出した書状いしづを一瞥して、洪庵は戸惑う。

そこには「愚息ぐそくは長崎修学おしむに赴く身、よき忠言ちゆうげんあれば賜りますよう」とあつた。

融通ゆうずうの利かない石頭。

それが洪庵に対する泰然の評価のほず。

——はて、そんな私に一体、どんなアドバイスをしるという……。

そう思いつつ、洪庵は言う。

「私は長崎では、あなたのお父上に大変お世話になりました。なので私に聞きたいことがありますたら、何でも答えて進ぜます。ただし私の長崎の知識は、もう二十年も前のものですが」

自分でそう言いながら、もうそんなに経ってしまったのか、と洪

庵は愕然がくぜんとする。

まさに光陰矢の如しこういんやだな、としみじみ思う。

そんな感傷ひたに浸る洪庵を現世に呼び戻すかのように、若武者の鋭い質問が浴びせられた。

「ではお言葉に甘えて遠慮なく。洪庵先生は蘭語の聞き取りと喋りしゃべに関して、どのように修学すべしとお考えですか。某の修学は、直接オランダ人医師から学ぶことになるやもしれませんので、これまでの蘭学の修学とは決定的に違うかもしれません」

それは、洪庵の弱点に、ずばりと踏み込んでくるような質問だった。

——嫌なことを聞く。

洪庵は顔をしかめた。さすが、自分と合口あいくちの悪い泰然の息子だけのことはある。

だがそこに、泰然のような毒気けれんみや外連味は全くない。

それは良順の容貌のせいかもしれない。

——鶴子餅つるこもちのような……。

そんな失礼なことを考えた洪庵は、あわててその考えを吹き消した。そして「茫洋ぼうようたる大人」という、当たり障りのない形容に置き換える。

いずれにしても、目から鼻へ抜けるような才子の泰然とは異質だ。底抜けに正直で親切な洪庵は、良順の質問にまともにも答えた。

「その問いに対する答えを、私は持ち合わせておりません。私は詭

み解きは得意なのですが、聞き取りと話すのは苦手なのです。先般、ロシア軍艦が天保山沖てんぼうざんに現れた時も、ロシア公使との応接は、弟子で塾頭の伊藤慎蔵しんぞうに任せたくらいです」

それを聞いた良順は驚いて、まじまじと洪庵を見た。  
なんと正直なお方だろう。

これほど偉くなったら、なんでも知ったふりをして、自分を大きく見せようとするものだが。

良順の脳裏のうりに、俗物と見切っている伊東玄朴げんぼくの顔が浮かぶ。

——あの生臭坊主なまくさぼうずと比べたら、まるで桃源郷とうげんきょうの仙人のような……。

そして、その桃源郷とは学問の世界なのだと察した。

父・泰然が、長崎に行く前に一目会っておけ、と言った意味が、少しわかった気がした。

洪庵はしばらく考えてから、言った。

「先ほどの質問に対する愚見ぐけんですが、直接オランダ人と会話をするのが一番よろしいのではないのでしょうか。それが可能なのが、長崎のいいところですよ。残念ながら私には出来ませんでした。あなたのお父上はそのように修学されていたようです」

「左様さようですか」

良順は少々拍子抜けひょうしして、ぼそりと言う。それくらいのごときは、良順もとづくに自分で考えついていたことだったからだ。

だが洪庵の言葉はそれで終わりではなかった。  
「ところで語学の修得のため、良順殿はどのようなことが重要だとお考えでしょうか。おそらくご自身の考えもおありかと。是非、ご教示いただきたい」

これには良順は、本当にびっくりさせられた。

緒方洪庵と言えば、今や天下に名高い比類無き蘭学の大家であり、比べれば自分如きは初学者に等しく、吹けば飛ぶような、微塵みじんな存在にすぎない。

そんな若造に、対等な立場で質問するなど、普通はありえない。少なくとも自分が学んだ江戸の和田塾や、佐倉の順天堂じゆんてんどうではなかったことだ。

まして今、身を置いている江戸城内の漢学せんだつの先達に、そのような人物はいない。

良順は、しみじみと総髮姿そうはつの洪庵を眺めた。

——なんとあけすけな、そしてなんと貪欲どんよくなお方なのだろう……。良順はそこに、洪庵という人の本質を見た気がした。そして、この人の言葉をもっと聞きたい、と思った。

なのでもう臆おくしているふりはやめて、堂々と自分の意見を開陳かいちんすることにした。

「正直申し上げますと、某は自分自身でオランダ語を修得する気な

ど、さらさらいけません。某には切り札となる者がおります。彼  
の者は、いかなる言葉も目で見て、耳から聞くとたちまち自分の中  
に取り込んでしまうのです。その手下は島倉伊之助しまぐらいのすけと言ひまして、某  
の薬箱持ちをしております」

すると洪庵は青年のように、目を輝かせて言った。

「なるほど、そのような方がおられれば心強いことですね。できれ  
ば私も是非、ひと目お目に掛かってみたいものですね。ご紹介いた  
だけるでしょうか」

良順は首を横に振る。

「生憎あいにく、伊之助は故ゆえあつて故郷の佐渡さどに戻つておりますが、長崎に  
呼び寄せようと考へております。とにかく不可思議な才があり、言  
葉の中身を理解しているように思えないのに、こと外国語に關して  
は一を聞けば十を知るような奴です。かつて玄朴殿のところところで蘭書  
を書写させていただいた時は、その速さは某の十倍以上でした。ひ  
と目見た頁ぺーじを丸暗記し、書き下ろすような感じでした。更に驚くこ  
とに、そうした文章を全て完璧に覚えており、何年経つても簡単に  
思い出せるという異形いぎようの才の持ち主すがめとして。眇すがめで、どこを見てい  
るのかわからない様子なので、周囲の者には、伊之助は三つの目を  
持ち、天意を見抜いているのだ、などと申す者まで出てくる始末しまつ  
す」

島倉伊之助は良順の用人上がりで、一時は佐倉順天堂にいたこともあった。

だが門人たちにつまはじきにされて、故郷の佐渡に戻っていた。のちに彼は良順の意思に従って長崎に赴き、オランダ語のみならず中国語、英語やドイツ語まで修得してしまう。

そして、司馬凌海と改名し、明治初期に東大医学部がドイツ人教師を招聘した際、通訳としてただ一人対応し、比類なき語学の天才として世に知られるようになるのだった。

「なるほど、浪速でいうと、橋本宗吉師匠のようなお方でしょいか。適塾では村田蔵六がそれに近い才を持っていますね」

「村田先生のご尊名はかねがね伺っております。半蔵門の『鳩居堂』は、江戸では押しも押されもせぬ第一の蘭学塾と評判でございますから。最近江門でもようやく蘭学に対して締め付けが緩くなってきた、と父も喜んでおりました」

そうした変化は黒船の衝撃のせいであることを、蘭学者たちは当然自覚している。

二年前の十月、幕府が長崎に海軍伝習所を開設したのを皮切りに、怒濤のように蘭学への傾倒が深まった。

そんな風に、世はあつという間に蘭学を飛び越え、英学に移行しようとしている。自分がこれまでやってきたことは何だったのだろう。

自分の来し方に思いを馳せて、ぼんやりしてしまった洪庵を、良順の声が現実に引き戻した。

「大変参考になりました。父が洪庵先生を高く評価している理由がよくわかりました」

——ほう、この若武者は、心にもない社交辞令しゃこうじれいも言えるのか。

洪庵は妙に感心した。それは泰然の血脈とは全く違う手触りだった。

だが洪庵は、すぐに思い直す。

——いや、待て待て、父親と同じで、一流の皮肉屋かもしれないぞ。

なにしろ、あの泰然がわざわざ立ち寄りさせたのだ。素直に取れと言う方が無理がある。

ところが良順の方は、決してお世辞せじを言ったつもりはなかった。彼にとつて参考になったのは、語学に関する洪庵の助言そのものではない。

その姿勢だった。

自分より格下の者にも対等かつ誠実に対応する、という態度が修学に一番重要だ、ということを経験して感じ取ったのだ。

洪庵は良順に、乱世を生き抜くための指標となる、もつとも重要なことを伝えていた。

きよしんたんかい  
虚心坦懐、自由平等。

洪庵の師、中天游譲りの『フレイヘイド』の精神である。

「ところで、御典医のお仕事はいかがですか」

洪庵が話の接ぎ穂に水を向けると、良順は深々と吐息をついた。

「いやはや、酷いものです。時の流れが止まった、べた凧のような世界です。このご時世で多紀真院殿が思いつかれたのが古典の完全復刻でして、老中を動かした半井氏秘蔵の『医心方』原本を召し上げ、御典医総出で漢方の良方を再発見しようというのです。今やらされているのは黴の生えた經典の虫干しです。時代錯誤も甚だしい。某は佐倉順天堂で父から蘭方の手ほどきを受け、塾頭の山口舜海に臨床を教わった、生粋の蘭方医です。それが何の因果か漢方の総本山にぶち込まれ、鬱屈は甚だしい限りです」

良順は堰を切ったように話し出す。將軍の脈を取ったりご機嫌を伺うことは、医師のすべきことと思えない、としきりに嘆いた。

——こうしたあけすけな物言いはお父上にそっくりだな。

血は争えないものだ、と思う。

けれども泰然とは違うところもある。父親より上品で、他人を上から見下すような感じはないな、と感じた洪庵はくすくす笑いながら言う。

「奥医師という身分はなかなか窮屈そうですね。私にはとても務まらなさそうです」



「洪庵先生は奥医師になぞ、ならない方がよろしいかと存じます。  
時間の無駄遣いですから」

更にひとしきり愚痴をこぼすと良順は、すっきりした顔をして礼を言った。

「思わず長居をいたしました。そろそろ失礼しようと思います」

「そうですね。ではその前にわが適塾の塾頭を紹介しておきましょう。血を見るのが苦手で、医術には向かないのですが、砲術や舍密、窮理に通じており、いずれ頭角を現してくる英傑だと思います。  
八重、福沢を呼べ」

へえ、と返事があり、ややあつて八重が顔を出した。

「すんまへん、福沢はんは塾生を引き連れて川原に行かれたそうで。豚の頭を持っていたとか」

「また解剖か。まあ、井戸端でやられるよりは、よいか」

そう呟いた洪庵は良順に言う。

「福沢諭吉は入塾二年で塾頭になった俊才ですが、才気が迸り出るような悍馬でして。うっかり手綱を緩めようものなら、どこへすつ飛んで行くか、皆目見当もつきません」

「そのような方にお目に掛かれないのは残念ですが、このご時世、いずれどこかでお目見えすることもあるでしょう」

良順がさらりと言うと、洪庵はうなづく。

「そうですね。あなたがなさろうとしていることはきっと、日本の医の土台となる、素晴らしいことです。お役に立てそうなことがあればこの老骨も、ご協力させていただきます」

「ありがとうございます。そのお言葉を頼りに頑張る所存です」  
頭を深々と下げて、丁寧に礼を言った良順は、ふと思いついた、というように言う。

「そうそう、すっかり忘れるところでした。父よりの書状がもう一通あります。洪庵先生との面談を終え、辞去する際にお渡しするよ  
うに、このことでした。では、御免」

そうやって良順は、適塾を辞去した。

松本良順が立ち去った後、洪庵はしみじみと思った。

——なんと見事な立ち居振る舞い。泰然殿の薫陶の賜物であろう。

そうして、かつての自分の教育方針が狭隘であったということを、認めざるを得なかった。

その時に洪庵は、次男（長男が早世したので、次男ではあるが事実上の嫡子）の平三と三男の四郎のことを考えていた。

二人は、洪庵が彼らの教育を託した加賀大聖寺の渡辺卯三郎の元を脱走し、大野藩校である「明倫館」の頭取に就任した伊藤慎蔵の処へ走ってしまったのだ。

師に対する礼を失した行動に洪庵は激怒し、二人を勘当かんとうすると慎蔵に告げた。

四カ月後、手紙で事態を伝えてきた伊藤慎蔵が、わざわざ大野藩から出張してきた。

久々に師・洪庵と面会した慎蔵は、懸命に若い二人を擁護ようごした。その表情には一点の曇りくももない。

「俺には坊っちゃんたちの気持ちちが、痛いほどわかるんです。時代が目の前で奔流ほんりゅうになっているのに、自分は空気が凍ったように動けないという、焦りあせです。憚りはばかながら先生は、坊っちゃんたちに酷なことをなさっています。塾生には時代に追いつけ追い越せ、と尻を叩いておきながら、ご子息には干からびた餅のような古い学問を食せ、と命じているのですから」

「それは考え違いというものだよ、慎蔵。物事を学ぶには何より土台が大切だ。今の日本ではそうした土台は、漢学から打ち立てるのが常道じょうどうだ。いきなり蘭学を修めさせたら、できの悪い二代目になるだけだ。こう言うと失礼だが、適塾に修学した伊東玄朴殿やわが師・坪井信道先生つばいしんどうのご子息の行状ぎょうじょうを見ればわかるだろう。平三や四郎には、ああなつてほしくないのだ」

「先生が危惧きぐされていることはわかります。あの連中は学が先んじていることを鼻に掛け、精進に欠けていました。でも坊っちゃんたち

は違ひます。真摯しんしに蘭学を学び、世のため人のために一刻も早く世に出たい、という気持ちでいっぱいです。そんな風に羽ばたこうとしている若鳥を、籠かごの中に押し込めてしまうのは、良策と思えませ  
ん」

慎蔵の言葉に、洪庵の気持ちは揺らいだ。

だが、勘当を撤回する気はさらさらない。

ただし、くれぐれも二人の教導を頼む、と洪庵は頭を下げた。

「仕送りは止めるが、これを機に人一倍の苦勞をさせることで人間を鍛きたえたい。そのつもりでよろしく頼む」

八重は二人の息子の勘当を知り、泣いて撤回を願った。

けれども洪庵は頑がんとして、八重の願いを聞こうとしなかった。

きんげんじつやく

謹厳実直な渡辺卯三郎は、洪庵の希望通り、二人を厳しく鍛えようとしたのだらう。

息子たちが脱走という大それたことをしでかしたのは、厳しさに耐えかねたからではない、と八重は直感していた。

慎蔵の妻のお鹿しかが適塾のお手伝いだった頃、ふたりの面倒をみていたことも理由かもしれない。

それは家に戻りたい、という気持ちの表れだったのではないか。

おそらく幼い息子たちは、優秀ではあるが、どこかいい加減な伊

藤慎蔵の学塾の、伸びやかな雰囲気に、家庭の空気を感し取ったの

ではないだろうか。

それは本能と言えるものかもしれない。

やはり幼い彼らを、手離すのは早すぎたのだと思うと、八重には二人の息子が不憫ふびんでならなかった。

だがそのことを、頑かたくなになった夫に伝えることは、どうしてもできなかった。八重はまた、洪庵のことも心の底から理解していたからだ。

そんな状況を打開しようとしてくれたのは、父の億川百記おくかわひやつきだった。八重が毎日泣き濡れている事を知った百記は、齢七十にしてひとり雪深い山々を越え、大野藩まで二人に会いに行った。

それは勘当され衝撃を受けている、幼い兄弟の気持ちを和らげるためには、どうしても必要なことだった。

実際、百記の訪問は、二人の兄弟の気持ちを救った。

冬の險路けんろの長旅から戻って来た百記は、平三の釈明文しゃくめいを携たずえていた。

——父上は漢学から始めた方が、後の蘭語習得にも益えきするところ大とおっしゃいますが、平三はそうは思いません。適塾の先輩たちは日々、蘭語の勉強に励んでおります。それを思うと、取り残されてしまったようで、いたたまれなくなります。その頃、慎蔵先生が大野藩に出仕され、蘭学塾を開いたと聞き矢も楯たてもたまらなくなり、

押しかけてしまいました。卯三郎先生に礼を失したことは申し開き  
ができません。けれども平三は、今回のことを悔くいてはおりません。

縷々るると綴つづられた手紙の真情に、洪庵は胸を打たれた。

婿むこの表情の変化を見た百記は、誰に言うのでもなく、ひとり言の  
ように呟つぶいた。

「幼いと思うても、子というもんはいつの間にか大きゅうなって、  
親元から飛び立っていくもんや。決して親の思う通りにならないのも  
また、子というものや」

舅の呟きを聞くまでもなく洪庵は、怒る気持ちはとうに失せていた。

——私は間違えていたのか？

平三の手紙を読んだその日から日々、自問自答を繰り返していた。

そして、松本良順の訪問を受けたその日、豁然かつぜんと悟さとった。

——そうだ、私は間違えていた。私の考えは古かったのだ。

ひな鳥は、自らの翼で飛び立たねばならない。

平三も四郎も自ら、時代の渦中かちゆうに身を投じようとしている。

巢立すだちの時が来たのだ。

洪庵は、平三と四郎の勘当を解いた。

それから渡辺卯三郎に対し、自分の不明を詫わびる、長い手紙を記  
したのだった。

伊藤慎蔵は大野藩の蘭学藩校「明倫館」で頭取を務めて教授に励んだ。慎蔵が頭取に就任して二年も経つと、修学を希望する門人が、周囲の藩からも陸続と集まってきた。近隣の丸岡藩、勝山藩、鯖江藩、越前藩など、二十に及ぶ藩から六十名近い学生が、慎蔵の名を聞いて、やってきたのである。

教育のやり方は、適塾方式をほぼ踏襲していた。

安政四年一月には、大野藩の重役で慎蔵のよき理解者である内山良休が、洋式造船の調査のため江戸へ向かった。

十一月になると、蝦夷地に運行する西洋式の大型船「大野丸」の建造伺いが立てられ、ついに箱館形の大型船一隻が大野藩用に建造することが決まった。

慎蔵は、今こそ大恩ある内山良休のお役に立てる時だ、と思い、いよいよ蘭学修養に励んだ。大野丸の運行に資するため、気象学と航海術の専門書「颶風新話」を翻訳し、全二十五巻の「築城全書」の編集も完成させるなど、意気盛んだった。

ところが大野藩内では、旧弊の藩士が藩の中枢を握っていた。このため無駄飯食いと思われた蝦夷地開発や蘭学修学など、慎蔵が関わる業務に対する風当たりが強くなり、いつしか、固く誓っていたはずの禁酒を破り、酒量が増えていた。

その頃、適塾出身の先輩の武田斐三郎は幕府直参に取り立てられ、

蝦夷地の巡検に派遣され、そのまま箱館奉行所に勤務することになった。

安政二年、横浜、長崎、神戸、箱館の四港の開港が実施された。

だが、箱館の町は対外的に無防備状態だったため、武田斐三郎に防衛施設の設計が任された。

箱館湾口の弁天岬砲台と陸の仏式城砦・五稜郭は、武田斐三郎が設計したものである。

斐三郎は箱館に入港中だった仏軍艦コンスタンティヌ号の副艦長からも直接指導を受けた。その後、大砲を作るための高炉や煉瓦焼場の建設、洋式ストーブの製造など、多方面で活躍した。

こんな具合に斐三郎は、来航した英米人から測量、捕鯨、採鉱、冶金術などの知見を貪欲に吸収した。

海防の充実のためには、喫緊に武器が必要とされた。

特に沿岸に設置する、大砲を大量に鑄造しなくてはならない。

そのためには質のいい鑄鉄を得るため、鉾山の開発が重要になり、高温で金属を精錬する反射炉も必要になってくる。

日本では嘉永五年（一八五二）、佐賀藩の鍋島直正が反射炉を本格稼働させたのが嚆矢である。また伊豆代官の江川英龍が着手し、彼が安政二年に死去した後で、安政四年に息子の江川英敏が完成させた葦山反射炉がある。斐三郎は、箱館にも反射炉を作ろうとして、



安政三年に、試験的に反射炉を作製している。

彼には、やらねばならないことは、山ほどあった。

斐三郎は、大砲を作るため銑鉄が必要で、良質の銑鉄を得るには反射炉が必要になるから反射炉を作るための勉強をした。それは何かを作り上げるために、ひとつひとつ、必要な煉瓦れんがを積み上げていくような、地道な作業だった。

やがて箱館に、幕府公認の洋学教育機関「諸術調所」しよじゆつしらべしよが開所した。

斐三郎はただひとりの教授となり、適塾の実力主義を採用した。それは、自分の頭で考えて必要なことを見出し、自分の手を使って自律的に行動できる人材の育成だった。

箱館で作られた西洋型帆船で日本一周したり、ロシアのニコライエフスクへの出張貿易や航海実習も行なった。

「調所の連中は悪徒連、武田は悪徒連の隊長」と悪評が立つのも構わず、斐三郎は、諸方面で活動した。

そこから郵便制度を創設した前島密まえじまひそか、日本鉄道の父、井上勝まさるなどの人材を輩出した。

それはまさしく、箱館の適塾そのものだった。

勝海舟は武田斐三郎を「終始一貫した人物で、わが国の科学技術の先駆者として万能の逸材だが、世の人がそれほど知らないのは実

に惜しい」と高く評価している。武田斐三郎は間違いなく、洪庵の  
適塾の直系の人材と言えるだろう。

この時代になると、このように日本のあちこちで、洪庵が蒔いた  
種が芽吹き始めていた。

大野藩に出仕した伊藤慎蔵と、幕府に召し抱えられた武田斐三郎  
という、適塾が誇る俊英二人に、蝦夷地開発という共通点があった  
のも奇遇きぐうと言える。それはある意味で必然だったのかもしれない。  
しかし残念ながら、二人が蝦夷地経営で協力するという、夢のよ  
うな場面は実現しなかった。

けれども後に緒方四郎これたか（惟孝）が、ペテルブルクに留学し、函館  
学校のロシア語教師になったのは、ひよっとしたら二人が導いた縁  
だったのかもしれない。

\*

長崎に到着した松本良順は、医学修学の新たな仕組みを作ろうと  
奔走ほんそうしていた。軍医のポンペ・ファン・メールデルフォルトは積極  
的だった。良順の訴えを聞いた彼は、日本の医学教育があまりに場  
当たりので系統立っていないことに驚き、呆あきれた。

それに反し、良順の医学に対する理解が深いことに感心した。

——マツモトを中心において、正しく教導すれば、日本で素晴らしい医学を打ち立てることができるのではなからうか。

ユトレヒト軍医学校を出て、速成で海軍軍医になったポンペは学術的には無名で、先達のシーボルトよりもはるかに格下だった。

だがポンペは几帳面きちょうめんで向上心があり、学生時代に丹念たんねんに取った授業ノートを持参していた。そのノートの存在と松本良順の熱意が、ポンペに壮大な構想を思いつかせた。

——私ひとりで大学教授を全て兼任し、実地に有用な医師を育成する、日本初の医学校を作り上げてみるか。

こうして、たったひとりで全ての学科を教授として教えるという、近代世界で他に類を見ない仕組みを持った医学校が、長崎の地で産声を上げたのだった。

良順の下には各藩から選りすぐりの精鋭が集まった。

良順はそんな彼らを十把一絡げじっぱいちからで扱った。

ポンペが口述した授業とノートをメモして日本語に翻訳し、生徒に示す役割を果たしたのが、佐渡から呼び寄せた島倉伊之助、後の司馬凌海しんかいだった。

こうして「長崎医学伝習所」は船出したが、それは幕府の正式な組織ではなかった。

良順は当初、現在の蘭学教育の仕組みを踏襲すればよいだろう、

と高をくくっていた。

医学は解剖学と病理学、内科臨床学の三本立てが基本で、オランダ語の教科書を熟読するという結構だ。当時の医学教科書は、解剖学の古典「解体新書」、洪庵が訳した「びょうがくつろん病学通論」、内科学の「ふし扶氏けいけん経験遺訓」であったことが、医学教育レベルを端的に物語っている。

だがそれでは西洋医学の上澄みうわすをすくい取るだけで、海面に顔を出した氷山の頭の部分だけ理解するにすぎない。

水面下の部分がなければ、冰山は海面の上に顔を出せないのだ。

また実技と連動させなければ、机上きじょうの空論になってしまう。

その点、適塾で解剖見学や化学実験がされたのは先見せんけんの明があった。

だがそれは正式な講義ではなく、意識の高い塾生が自発的にやっていたにすぎない。

一方、佐倉順天堂では外科書を会読しつつ、実際の外科術が行なわれた。これは斬新だったが、やはり系統立った教育は行なわれていない。

ところがポンペはユトレヒト軍医学校で学んだノートを元に窮理（物理）、舎密（化学）など、基礎科学から授業を始めたのだ。こうして日本初の、系統的な医学伝習が、長崎の地で産声を上げたのである。

\*

さて、良順が洪庵に手渡した、泰然のもう一通の書状について、まだ語っていないかった。

泰然は、自分が仕える堀田正睦侯が、老中首座になることを知り、洪庵に書状で次のように知らせてきたのだ。

——このたび堀田侯が老中首座を拝命なさるが、貴君の「フーフエランド」の訳書を出版する好機到来と思われる。しかしながら政情不安定な折、堀田侯がいつまで老中首座に留まれるか不透明ゆえ、この機を逃さず直ちに出版すべし。最初の巻さえ出しまえば、後は政情が変わろうとも続編として出版できるであろう。とにかく万障繰り合わせ、急ぐが吉なり。

手紙を読んだ洪庵は直ちに、訳了していた「扶氏経験遺訓」の出版に向けて動き出した。

医の心を説いた黄金律となる序言、「扶氏医戒之略」を急ぎ訳了し、十二月、積年の懸案だった「扶氏経験遺訓」の出版が始まったのである。

その頃、江戸には蕃書調所に勤務し、洋書、翻訳書の検閲部の近い組織に、適塾の元門人の箕作秋坪がいた。彼が、安政四年から刊

行まで全面的に尽力してくれたのも大きかった。

だが、この書が無事に刊行に至った第一の殊勲は、やはり泰然の書状だったと言えるだろう。

幕府の蘭書の翻訳書に対する姿勢は右顧左眄して揺れ動き、醜態を晒し続けた。

弘化二年（一八四五）七月には、医学書は漢方医の総本山である「医学館」を通さず、天文方の検閲で刊行できるようになった。その機を捉えた洪庵は、彼の代表作のひとつである「病学通論」を刊行している。

ところが嘉永二年（一八四九）三月になると、幕府は医学書の出版を全て「医学館」の許可制に戻してしまう。

その直後にオランダ医モーニケが輸入した牛痘が生着に成功するという快挙があり、幕府は赤っ恥を搔いた。

翌嘉永三年（一八五〇）九月には洋書の翻訳を制限し、巷間に流布する原書狩りにまで乗り出した。

外国船が頻繁に出没するようになった危機の中での言論統制は、逆噴射的な対応だ。

漢方医はそれに乗じて蘭医学の締め付けを強化し、現実的に蘭書刊行を完全に停止させた。

ところが嘉永七年（一八五四）に政医・伊東玄朴が、大槻俊齋おおつきしゅんさいの『銃創瑣言』の緊急出版にこぎつけた。

これは蘭書から銃創治療の要項を抄訳しょうやくしたもので、外国と合戦があるやもしれぬという状況下で緊急の書と認定され、「医学館」の許可なく緊急出版となった。

こうして漢方医の牙城がじょうは、あっけなく崩されてしまった。

そして安政三年二月には、幕府はまたも政策を大転換し、洋学研究機関となる「蕃書調所」を設け、新たな洋書や翻訳書の出版は全てそこで検閲するようになった。

かくして西洋医学は、長年の確執を経て、ようやく漢方医の抑圧の軛くみから完全に脱したのである。

そしてついに洪庵の「扶氏經驗遺訓」が日の目を見た。

江戸で完成した版木が海路で運ばれ到着するという報せしらせを受けて、洪庵は、受け取りのため、数名の弟子を伴い、自ら港に足を運んだ。

頬ほほを撫なでる風は心地よく、洪庵の足取りは青年のように軽やかだ。港に着くと、大型船が目飛び込んできた。

——ほう、あれが慎蔵ご自慢の大野丸か。

版木を大坂に運んできたのは、慎蔵が関わっていると言われていた、大野藩の大型スクーネル船・大野丸だった。

進水して間もない新造船の、三本のマストに張られた帆ほの白さが

目に眩まぶしかった。

ばんかんひき  
万感悲喜こもごもが胸に押し寄せ、洪庵を満たした。

思えばここまでするのに、なんと多くの人たちの助力があったことだろう。

誠にありがたいことだ、と洪庵は眩き、空を見上げた。

そして静かに瞑目めいもくした。

(つづく)